



豊後大野市教育委員会

会 議 要 録

議 題：第2回豊後大野市図書館及び資料館建設検討委員会

日 時：平成28年11月18日（金）18：00～20：18

場 所：豊後大野市中央公民館視聴覚室

欠席者：上野正博委員、杉浦嘉雄委員

副委員長：本日は委員長の渡部さんにテーマ「図書館の現状と今後の展開」ということで、講演いただく。

委員長：日本の図書館の歴史がすでに70年経過しているが、村には23%、町には67%しか普及していない。一方市は99%。市においては10市図書館がないという状況。公民館においては、一番多い時で35,000館ほど公民館があったが、現在は15,000館。どちらかというところ、公民館は数を減らしている。図書館は現在3,275館ほどあり徐々に増えている。富山県の舟橋村という人口3,000人の村で、10億円くらいかけた3階建ての立派な図書館があり、北海道の置戸町は、人口3,000人規模で10万冊規模。

私は2週間前に北欧フィンランドに行った。当該国は人口500万人だが、図書館が1,000館ある。一方日本が1億2千万人で、3,000館だから、この密度というのは相当高い。貸出冊数も人口一人当たり5冊の日本に対し、フィンランド含め北欧は20冊を超えている。それには秘訣があり、しっかりした活動と、それに伴う様々なフォローがあるが、その点は日本と違う。これは象に例えることができ、足や鼻や尻尾を見て図書館というが、やはり全体を捉えて図書館であるとしないと現在の図書館感はつかめない。

現在、図書館に対して、本はさておき“集まる”という点に重点を置いてしまっている。コーヒーが飲めたり、おしゃれな空間を求めたりすること以前に、図書館法やユネスコの公共図書館宣言というものを体現した国際水準の図書館を目指すべきである。学校の勉強を考えた時、塾に対して勉強は期待するが学校のことを期待しないように、貸出しのみしているのが今の図書館の現状。図書館は利用する人に支持されて成長するものである。

1. 図書館とは

図書館の定義「「図書館とは、図書、記録その他必要な資料を収集し、整理し、保存して、一般の公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資しすることを目的とした施設をいう。」であるが、現在記録（アーカイブ）が少ない。その他、調査研究やレクリエーションも行っているかど

うかを検証する必要がある。

また第1項全文に「土地の事情」とある。豊後大野市には豊後大野市の風土に合ったものが演出されているかどうか重要。“全国一律”に特化したところが現在の課題である。また条文に郷土資料もあり、図書館の資料は多様であるが、それを丹念に整備して利用者を獲得していく必要がある。さらに図書館の職員はそれらの資料について十分な知識を持つ必要もある。

分館について、スウェーデンを例示したがかなり広く、これは教育に力を入れているということ。これらを参考にすれば、博物館の資料の展示方法と図書館は異なるが、公民館を含め色々なことができる。さらに学校や研究所と連携を取ればもっと広がる。

ユネスコの公共図書館宣言について、幼い時期から子どもたちの読書習慣を育成しそれを強化することが示されている。個人の自主的な教育を促している。図書館においてピアノコンサートを開催したりもできる。また地域情報を集めることに努力する。やれることからやって行けば、図書館の武器になり、市民の協力や今までの図書館感を変える動きになって、図書館の利用は促進される

私は上記のことを森山図書館（長崎県諫早市立の図書館、次回の研修地）で行ってきた。しかし「貸出し中心」「児童中心」の図書館感あり、図書館に対し様々なイメージを持っていると思う。図書館が苦境に立たされているのが現状であると思う。

2. 施設設備と新しい潮流

20年単位で図書館は動いている。実は図書館という言葉は日本から他国へ伝わった言葉である。ただ、戦前、図書館法に基づいた目的が遂げられておらず、みんなが自由に閲覧でき、利用できる図書館ではなかった。新しい法律の下で誰でもが使える図書館像になったのが、1950年の法律が制定された時である。

1970年代に、図書館があまり定着していないため、図書館の職員を中心に戦略的に図書館を普及しようというようことがあり、そのときの考え方が貸出中心や児童中心の図書館像であった。ただ貸出しの手続きも身分証明書の提示を求めたりするなどして面倒であった。それで、その障壁をなくしたので図書館がより広まった。三重町は県で（日出町の次で）2番目に図書館ができ、3番目は私がつくった緒方町だった。

70年代より都市部を中心に設置が広まった。図書館にコンピューターが入った。そのような機械にとってかわられないよう図書館職員も危機感を感じ努力した。

2010年以降は、欧米の図書館の方から新しい動きとして、アクティブラーニングや課題解決、まちづくりという形のものに、大学図書館等々から動きがあって、いま、お手軽な図書館みたいな簡易な図書館から、もっと簡易な発想を変えて、関わっている何か作り出してくれる図書館が求められ始めた。

図書館法制定から市民の図書館まで

○50年以降の様子 重圧型。保存志向

(資料 2 ページ目) 写真は県立図書館。保存中心の図書館である。これは市民の図書館が出来る前の状況。

市民の図書館から 80 年代後半まで

○70年以降 貸出と児童に力点型

70年以降は貸出中心ということになる。建物構造上イス、テーブルが少ない。(資料 3 ページ目) 写真は徳島県のある町立図書館。広く、機能的(機械的)である。それからコンピューターの普及によって、長く居場所空間としての図書館を研究し始めた。その動きが出始めたのが 1990 年代だと思う。

電算化と多様化

○80年代後半以降 電算化と滞在志向

(資料 4 ページ目) これは、今度見学する予定の、私が作った森山図書館(長崎県諫早市)。当時人口 5 千の町 2,000 m²の今の豊後大野市より大きい、木造で日本一大きい図書館である。蔵書数 15 万冊の図書館を作り、ここに掘りこたつもあり、居場所空間として求めた。従来の機能的なものよりはそこに滞在してもらえるつくりになっている。ワンフロアーで館員の方がデスクで見通せるもの 70 年代型の図書館の方が管理しやすいし、デスクマネジメントということを見ると、どこに何があるかというのが分かる。しかしそれをあえてすて、死角を作った。そこにたまり場をつくった。新しい時代の知恵を蓄積する人々が交流できる場として。そういうことを 90 年代にやらせていただいた。

現在の動き

○課題解決型とまちづくり志向

現在は課題解決まちづくり志向型で、単に長居するのではなく個部屋で、まちづくりや調査研究のために集まって議論できる場も提供する。(資料 4 ページ目) 写真はコミュニケーションライブラリー、これは東京でランクの高い吉祥寺の武蔵野プレイスというところの、空間の処理。ここには、まちづくりの参考になる、従来集めてなかったような住民活動や様々な活動のリーフレット、その他細かなものまでたくさん設置している。それを見て、本と一緒に情報としてそこで総合的に議論できる。まさに時代がそのような形(スタイル)に移っていている。

3. 国内外の図書館の動きに沿った図書館設備

①保存機能の確保

(資料 5 ページ目) 大阪府立の図書館だが、保存機能を中心とする図書館で、

そうしたものも無くはない。保存機能は重要だけど、全てが重要である。

②資料提供の迅速化

コンピューターが導入され世界中の図書館とオンラインで結んで、イギリスの図書館に問い合わせをしてもいいというような時代。今までの過去の図書館感からやや発展したサービスのありようが求められていると思う。(資料 6 ページ目) 写真は自動返却装置で、本が図書館に返却されるとベルトコンベアーに乗せられて、書棚にいて整理が出来る装置。これはドイツの図書館。機能も近代化し、新たな役割を歩み始めたのが現状である。今はその転換期である。

③子どもへの情報リテラシー

(資料 6 ページ目) これは、子どももインターネットにアクセス出来る。これは、隈研吾さんが設計した富山市立図書館。東京オリンピックの会場を設計しようとしている人。

④コンピューターの利用促進

(資料 7 ページ目) これは、中津川の図書館とオランダのアムステルダムの図書館。インターネットやそうした情報にアクセス出来るようなもの。そういう役割も必要だと言われている。ただしきちんと図書館法やユネスコの公共図書館宣言を履行すればという条件がある。

⑤芸術文化・科学技術へのアクセス

(資料 7 ページ目) 和歌山県有田川町の図書館だが、図書館によっては入口や玄関に、こういう物が飾られている。こういうことも積極的に図書館がやり始めた。

⑥地域の企業・地域情勢

(資料 8 ページ目) 地域の企業や地域関連の情報を集めるといった、まちづくりに関する情報や地域行政資料の収集や展示もある。これは、行政におけるシンクタンク機能でもある。こういうことも手掛けていくという時代にきている。

⑦地域及び多文化理解の促進

(資料 8 ページ目) これは、ストックホルムの大きな図書館の横にある移民の人達を対象とした図書館である。4 階建てで 1 階ごとに言語が違う。アジアの言語、アフリカの言語。このような図書館は日本中のどこにもない。国が“図書館で学ぶ”ということをしつかり保障するということである。次が、草津温泉図書館。そこに温泉があって、図書館の職員が一生懸命頑張って温泉資料を集めていたら、ポロポロの図書館が一等地に移動した。人口 5、6

千の町だが、温泉の関係資料も置いている。ここで言うと、ジオパークみたいなもの。それを丹念にやっている。草津町は温泉地なので、温泉情報もあってこの地域のいろいろな情報があれば、1泊余分に泊まろうかという気分になるような仕組み。豊後大野市も同様で、豊後大野市に行かないとジオパーク資料が手に入れないということになる。

⑧連携への配慮

(資料 9 ページ目) 博物館などと連携するという意味で、この写真はドイツのシュツットガルトで、図書館職員の個室がある。図書館職員は社会的地位が高いことのあらわれである。

⑨繋ぐ、結ぶ機能

(資料 9 ページ目) 私が手掛けた滋賀県にある愛知川図書館で、外にイスを置いていることにより自然発生的に、お年寄りや子どもたちが一同に会し会話する。このあと子どもたちは、地域の情報をまとめて本に出す。その本が講談社の本に紹介されることになった。地域の興味関心が広まれば自発的な学びがどんどん広がるので、そういう機会を作るようなことが謳われている。次は、富山県の舟橋村の図書館の一角に、観光協会の一部がある。イギリスなどはインフォメーションコーナー、そこに行けば旅館情報、観光情報、図書館の中に整備されている。そこに行けば、なんでもその地域がわかるという機能を持っている。

⑩調査相談機能

調査相談機能は重要で、積極的に調査相談をやるような時代が到来している。これは、先ほど説明したようにコンピューターの発達により、さらにサービスのその上を目指すためにも、取るべき手段であると考えている。写真は、北見市の駅前にある図書館で各階に調査相談を設けている。それに対してヨーロッパ、例えばイギリスでは相談に行列ができています。

4. 新たな展開の場の図書館に必要な点

①空間としての快適性

図書館は落ち着いて、気持ちを新たなものに転換出来るような、頭の中がチェンジ出来るような空間であるほうがいい。図書館にはまた人がいて気持ち良くさせる館員のホスピタリティも必要です。

②資料管理の機能性

図書館は管理が細部までいきとどいていて、円滑に誰でも分かるような整理が必要である。例えば外国人に対しても、マップやローカルスタイルでそこに行きたかったら番号ですぐに分かる仕組み。迷うことなく、また言葉が喋れなくてもそこに行くことができるそうした仕組みはちょっとしたことだが

必要である。

③利用者の安全性

地震などの災害で本や本棚が倒れ死亡したケースもある。安全性というのは非常に重要である。

④可視性と可変性

一目でわかる図書館内の状態。

⑤敷地と建物の拡張性

将来的なことを考えると図書館が大きくなる可能性もあるので、土地については増設が出来るような準備をしておく必要がある。今は20年後について考えるが、次の40年後にはどうなるかということも予測したものが求められると私は思う。

5. その他

- ・ 図書館は成長すると言われている。職員も育つ、住民も育つ、全てが膨らんでいく。住民に支えられて職員も頑張る。頑張った職員のサービスが、また住民に還元される。
- ・ 博物館も、同様である。活動が市民に定着してしていく。
- ・ 図書館は、結局は誰が作るかと問われると、それは住民も含めて人であり、人が作る仕事である。そしてその空間を市民と協働で作って、また還元をする仕組みを作れば、図書館の重要性は機械ではないということがわかる。機械は故障する。
- ・ 図書館は建物を造って終わりではない。作ることがスタートである。また図書館職員は、もっと脱皮して成長していくようなプログラムや研修機会を与えられることによりさらに成長する。研鑽を積んだ職員は成長するしそれに呼応して住民も成長し、最終的には図書館の利用のスタイルが違うものになる。そのことが市民に理解されれば、「図書館をつくって無駄だ」という声が絶対出てこない。
- ・ 博物館も、博物館法に沿った博物館を目指すという形で、民族も自然のレンジャーもあるし、いろんな形で市民と共に研究活動を行う必要があると考える。そして博物館は研究者が研究のために利用するものではなく、市民の学びをサポートしていくもの、市民が育っていくような視点が求められていると考える。それが本当は生涯学習と言われるものである。
- ・ 現在図書館が学校教育的な発想で、集団的な学習に特化している。そうではなく、個の学びをきちんとサポートし、図書館自身がそれを学んでいくスタイルになれば、図書館は図書館の役割として非常に大きなものになる。逆にそこが抜けていると、図書館で本を読んで文学書を楽しんで終わるといふ、ある種レクリエーションの要素の強い図書館になってしまう。その

-
-
- 点に関して、全てを否定しないが、図書館でもっと深く勉強して人生を豊かにしようとする人の一助になってほしいと思う。
- ・産業の振興のためにどうする、観光のためにどうするとか、地域振興のためにどうするかという学びがそこで用意されていれば、そのことで地域が豊かになると確信している。
 - ・もう1つ例を申し上げますと、鳥取県の海士町の例である。人口2,400人の島まるごと図書館というのがあり、役場の職員や議員さん方の給料をカットしても合併をせず頑張っている自治体である。地域産業と教育、図書館に力を入れて造った図書館の“海士町島まるごと図書館”は、全国から注目を浴びている。学校図書館も充実し、公共図書館も今どんどん成長している。図書館の家具は間伐材を使用し、皆で作っている。そうやって住民と協働の空間を作っている。だから、町が一方向的に作るのではなく、またどこかに丸投げするのではなく、町民とともに作っていく。その空間も作っていく。住民と共にキャッチボールが出来るような空間が出来れば、私は大きな学びの拠点になると考える。
 - ・久保田教育長から「学校図書館と公共図書館の合体というものを考えてもいいじゃないか」という話があったが、スウェーデンの人口6,000人の町に学校と廊下で行き来できるような図書館がある。島根県の揖屋町に似たような例もある。固定観念にとらわれず、将来ビジョンを考えていった方がいいのではというのが今の私の考えである。
 - ・図書館が根付いてない地域で「図書館をつくる」と言ったら「図書館にお金をかけてどうするのか。」というようなことを言う方がいるかもしれないが、私は行政サービスとして、図書館は最高のものだというふうに思っている。図書館が利用されればされるほど税金が還元され、知恵が還元される。知恵が育まれて、それが皆さんの生活と人生を豊かにする。
 - ・私は今大学の教員をやっているが、私の知識は限られている。図書館に情報を集めてどう使うかは、住民の方々に譲るべきであると思っている。
 - ・今回は今ある図書館像を全てリセットして、新しい豊後大野市の図書館像を込めて、これが利用者に支持されるようなスタンスのものが広がれば、豊後大野市から日本の図書館が変わってくるのではないかと、そういう思いを持って私は来ている。
 - ・問題はソフトであると考えている。システムをどう構築するか。いまお金がなければ将来的に5年後に中央館が成長したら5年後に整理するとか。一挙にやるのではなく、徐々に徐々に浸透させていくようなものが、住民の方々の信頼をいただけるのではないかとと思う。
 - ・私は、フィンランド、スウェーデン、デンマーク、ノルウェイ、オランダ等々の国を歴訪し図書館を見てきたが、その国々は小国だが教育に力を入れて、資源が無いから人間の知恵に力点を置いたのではないかなと思っています。
-
-

川野課長：渡部先生の講義を踏まえ、何か意見はありませんか。

田原委員：例えば、豊後大野市のように7町村が合併して大きな市になった場合、図書館をどこに設置するか、また図書館設置の考え方を全ての住民に徹底させるためには、どのような手立てが考えられるのか。

委員長：町村が合併して、30万冊の大きな図書館をいきなり今作ろうとすることはなかなか難しいということもある。まずスケール感を持ち、中央館というものが必要だと思う。その分館の機能をどうするかというところが、例えば先ほど出た学校図書館との連携や、ランチを設けてやっていくということも1つの方法であり、それは今後の検討課題でもある。例えば中央館からランチへ連絡車をまわすという考え方もある。それを踏まえ私はある程度の中央館の大きさというものは、いまよりも大きなものを考えないといけないと思っている。ただ、分館があって旧町村の感情があるだろうから、そこにランチとしての機能をもつようなものをどうつくっていくかということを考え、さらに経済的なことを考慮し、今ある地域資源を利用した形でそこは相乗りするような格好でランチとして位置付ける。いま公民館図書室があるが、たしかに公民館図書室と図書館の機能が少し異なると先ほど説明した。それは、分館と言われるものは図書館的な発想で、利用者のプライバシーを守りつつ、図書館法の範囲で行われなければランチとは言えないと思うのでそこはシステムをどう作るかということになる。

また、もう1つの考えとして、これは仮の話だが三重につくるのではなくて、例えば、千歳と犬飼と三重の間の菅生あたりに1館づくり、緒方と清川あたりにもう1館つくる。そしてその2館を大きくするという発想である。このような取り組みを行っているところもある。

ただ、そのためには“継続的に借りにくる”図書館を目指してつくらないと、作っても利用されないのでは意味がない。建設を大手コンサルタント会社に任せっぱなしにするとそうなる。少なくとも、人口1人あたり全国平均を超えるようなものをつくらないと、図書館をつくったことにならない。当然そのためにはそれなりの工夫が必要である。

衛藤委員：今の渡部委員長のご説明を聞きながら、非常にいいなと感じた。図書館が成長し、図書館と共に市民が成長していくということは、非常に重要だなと私は考える。第1回委員会の時に、今のままの状況で図書館をつくっても宝の持ち腐れになるのではないかと心配していた。

そのためには、いろいろなシステムの構築をそれも知恵を出してつくっていく、いきなり大きい物をつくるのではなく、それぞれの状況に合わせながらつくっていくということも大事であると委員長がおっしゃったが、私もそういうことを検討しながら、市民のいまの図書館に対する理解度を見ながら

図書館づくりを発展させていくということが重要であると思う。市もお金が豊かにあるというわけではないので。

委員長 : まさしく成長しない、市民不在の図書館をつくって、それが使われなくては意味がない。図書館をつくる方法として、コンサルに任せてその運営自体もコンサルがやるということは物理的にはできる。ただそれは見せかけの図書館である。そうすると市民と図書館に距離が出来る。そこでさきほど述べた図書館法の中の、『土地の事情に沿って』というところが非常に重要になる。それを忘れた図書館が日本中に広まり、スーパーの支店のような形でつくられ、成長もしなくなった。そうではなく、市民と共に資料も潤沢に集める仕組みを作れるような、図書館にかかる経費も地域に還元できるような仕組みを作れば、市民は図書館建設を反対しないと思う。

私がつくった図書館は今も継続的に図書購入費が3千万円である。市民は何も文句は言わない。2000年にオープンし、もう16年経っているが変わらずに支持をいただいているが、そういう図書館をつくるには非常に力が必要である。そのためには計画をしっかりしなければ根付かない。

自治体が大きい小さいにかかわらず、基本は同じで、大きな町であろうと、小さな町であろうと、支持をいただけて利用が促進されるような、お金をかけても惜しくないというような図書館を目指していきたい。

後藤委員 : 自分がこの委員に選ばれたことをきっかけに、公民館にある図書室の見学に行ってきた。そこに行ったらわかったのは、公民館図書室の利用者が求めていることが、必ずしも当該図書室の本の充実ではなさそうであるということだ。図書館に本をリクエストすればそれが当該図書室で手に入る仕組みがあるからである。大人はそれで足りている。また子どもはというとたくさんの資料があるから三重にある図書館に行くとのこと。図書館から素早くリクエストした本が届けば今のユーザーには事足りるのではないかと思う。

話しは変わるが、私は沖縄出身で沖縄では戦争で歴史資料がなくなってしまった。ところが三重に来て、古文書や史跡が残っているので凄いなと思った。それで自分も興味があって講座を受けた。歴史に対して、子どもたちは古臭いとか怖いというイメージがあり、とっつきにくいらしい。しかし真名の長者などについて絵本などで似たような伝説のお話があると、読み聞かせを通して子どもたちに教えたら凄く興味を持ってくれる。また白山の蛍の写真を、本を通して伝えと子どもたちも理解してくれる。そのような点では図書館と資料館は一致するのではないかと思う。

また佐賀にある武雄図書館は大手有名コーヒーチェーン店が入ったりして名が知れ渡っているが、図書館としてはクオリティーが低いということで酷評されている。しかし観光面を含めた収益も上がっていると聞くが、集客という意味では良いのではないかと思う。私個人としては豊後大野市として目立つ図書館を目指してほしいと思っている。重要なのは大きさだけでなくシ

ステムであると思う。

委員長：本を読まない住民にどのようにしたら読んでもらえるか、そのためには図書館感を変える必要がある。小さい町でも大学でも、図書館が利用される仕組みさえ整えば多くの人が利用する。

吉岡委員：インターネットの普及に伴い、リアル書店がなくなるのではないかとされている。実際本屋さんが減ってきているが、そのことは逆に図書館の意義が大きくなっていると私は思う。全ての人がパソコンなどの電子媒体を使いこなせるわけではないので。図書館で本に触れるという機会は必要である。図書館は、市民の方がわからないことや調べたいことがあればそこに行くところであると思う。何より図書館に来て職員に聞くなどしてどうやって調べればいいのかという行為こそ生涯教育ということになると思う。豊後大野市には歴民俗資料館もあり、またそこに歴史や、地質について地元で詳しい人がいる。そういう人を有効に活用すべき。そういう意味で図書館において、充実したサービスをすれば必ず活用される良い図書館になると思う。

委員長：地域に根付くもの、ジオパーク関連のもの、歴史やそうしたものが図書館に行けばわかるようなものになる、それを目指すべき。

ネットについては、インターネットでお手軽に情報があっても、出典が明らかにされるものでなければ、これは本で確認しなきゃいけないことになる。

藤内委員：日出町図書館は2年前に新しくなり大型商業施設の一角にある。どこに建てるとか青写真はあるのか。

川野課長：青写真はありません。20万冊となりますと2,000㎡ということになりますが、用地を購入するのかということにもなり、財政力も関係しますのでこれから財政担当課と話をしながら決定したいと思います。皆さんの中で市が出すことのできる情報を提供しながら、場所はこういう所でいいかなということこれから議論していただきたいと思います。

委員長：お金の話を最初からすると話は進まないの、財政的に予算として成り立つかどうかは財政の方に判断いただくこととしたい。理想とは言わないが市の規模にあった形のを追及することは必要なのかもしれない。ちなみに滋賀県の愛知川は15億円で、土地購入費が1億円、建物が12億円、本の購入費が1億円である。シアトルになると400億。

渡邊委員：委員長（渡部幹雄図書館長）に2点質問したい。1点は、人口4万くらいのところで、比較的全国の中ではいいなという図書館を教えてください。

もう1点は、これは私個人の意見だが、現在の中央図書館は、それなりに使い勝手が良いと思う。このことに加えて、先生のおっしゃった様々な機能を図書館に加えていけばよいのではないか。先生はどう思うか。この今の図書館を気に入っている人はたくさんいると思う。

委員長：今の図書館が悪いというわけではなく、20年後、30年後を見据えた上での建て替えということ。貸出冊数や蔵書数という指標が様々あるが、市がどのような図書館を目指すのか。例えば緒方町の長谷川の人も犬飼町の長谷の人も朝地の人も、みんな図書館を意識するが、三重周辺だけを意識される図書館だったら、全市民対象のものになり得ない。新しい図書館は全市的な水準で作られるべきであると思う。

萩原委員：次回の研修（諫早市）で、渡部先生が手がけた森山図書館を見て、（設計や構想について）足したり引いたりしたら良いのではないか。あまり議論して深入りしても意味がないのでは。

委員長：森山図書館は本年6月に落雷を起因とした火災にあって現在圧縮したサービスをを行っている。

萩原委員：もう1つ、本委員会の開催時間をもっと早くしてほしい。

衛藤委員：私の行政の経験上安易な指定管理はサービス低下につながる。要は人である。指定管理などについて何か良い事例はないか。

委員長：袖ヶ浦は直営である。瀬戸内市も直営である。私は指定管理が全部悪いと言っているわけではない。その図書館で働く人がずっと専門性を担保されて、それ相応の賃金をもらい、働き続けることができるのが重要である。

工藤委員：図書館の建築に関し、設計を請け負った建築家が芸術作品をつくるかのように、利用者のことをあまり考えていないような建物（図書館）になってはいけないと思う。渡部先生のような経験豊富が方と、私たち一般市民が意見を出し合って検討して図書館をつくることのできるのは大変嬉しいことである。また、新図書館ができた後に、残りの6地区に分館を充実させることが難しかったら、大人のための移動図書館があってもいいなと思った。

川野課長：開催時間については、申し訳ありませんでした。

佐藤委員：渡部先生の頭の中に青写真があるのか。先生の青写真にしたがって進むのか、それとも各委員が意見を出してそれを参考にして先生の取り上げていただいたものが進んでいくのか。

委員長：イメージはある。ただ、現場の声を聞きながらここに合ったものをどう演出するかということは、やはりじっくり検討した上で行っていきたいと思っている。

川野課長：はい、ありがとうございました。

次回（第3回）は、12月9日、金曜日。長崎研修になります。ではこれをもちまして第2回目の建設検討委員会を終了させていただきます。

田原委員：次回（第3回）は実際現場に行って実物を見るということが主体である。そのあと1月から、本格的な議論をするというような計画のようである。今日は、お疲れ様でした。

記録者：小野